

## 「カブトムシさん！」 山鳩保育園（京都府八幡市）

< 1歳児 >

8月初旬、虫グループの4・5才児が、夏期課外スクールの夜間体験での仕掛け罠で採ったカブトムシを飼育ケースに入れて乳児クラスに見せてくれる。保育室で、金魚、めだかなどを飼育しており、日頃から異年齢のお兄ちゃんたちからダンゴムシ、アリ、バッタ、亀、蝶などの生き物に触れる機会を多くもたせてもらい、生き物に慣れ親しんでいる子どもたちは、早速、いつものように誰からともなく手を出し、触ろうとする。「痛い〜！」「怖い…」とカブトムシの足の感触が鋭く、皮膚にくいこむために次々と手をひっこめる。しかし好奇心旺盛な子は、それなら身体だけでもと指で触れたり、自分の身体を横にして視線を同じにして観察をしたりする。やはり興味、関心がある様子なので飼育することにする。給食室に子どもたちと出向き、今日から3時のおやつに毎回出る果物の残食をとっておいてもらえるように協力をお願いした。

### （1日目）「寝てるみたいだけど、触ると痛い！」

子どもたちは登園後すぐに「かぶとさん、おはよう！」と飼育ケースを取り囲み、「せんせい、出してー」（飼育ケースから出してほしい）、「貸して〜」（持ちたい）と催促しはじめる。保育者がフロアの上に置くと、「歩けへんな！」「寝てるの？」とカブトムシの鈍い動きにがっかりした様子だったが、あきらめない子どもは、背中を突っつき、動かないなら大丈夫だと思ったのか、つまんで持ち上げる。「痛いー！」と悲壮な表情で振り落とし、それを見ていた子どもたちもカブトムシに触ると痛い目に合うということを再認識した様子であった。



### （2日目）「カブトムシはおうちを散らかす」

前日の夕方に子どもたちと給食室でもらった果物と土にまみれた空っぽのゼリーケースが散乱した飼育ケースの異変に気付いた子どもたちは、「ぐちゃぐちゃー」、「せんせい、見てみー」と心配そうな表情で保育士に次々知らせにくる。保育者が「ぼっぼ組さんがお家で寝ている間に、カブトムシさんはごはんを食べたり、走ったりしてたのかなー」と話すか「おとなしいカブトムシ」しか見たことのない子どもたちには、夜行性のカブトムシの生態を想像できないので、ほとんどの子どもはキョトンとした表情であった。

以降も毎朝この飼育ケースの“ぐちゃぐちゃ”が続き、子どもたち同士「いっぱい遊んでんなあー」と会話をしながら保育士と掃除をするのがぼっぼ組の朝の日課となる。

### （10日後）「カブトムシは飛ぶ！」

午睡準備を終えて暗幕カーテンを引き、消灯してしばらくたった時、子どもたちの頭上でブーンと音を鳴らしながら、天井スレスレに飛ぶ黒い何かが！その時は保育士もカナブンか何かの害虫かと一瞬思ったが、一人の保育士が叫んだ「えっー！！カブトムシ?!」の一言に、ぼっぼ組はたちまち大騒ぎ！ブーンと大きな音を鳴らしてすごいスピードでみんなの頭上を飛び交うカブトムシに全員の目は釘付け状態になり、「暗いから晩とまちがえたのかなー」「広いところを飛びたかったのかなー」に子どもたちはますます大興奮！

やっと保育士がカブトムシを捕まえると、子どもたちが口々に「飛んだなー」「ブーンって言ったな」とおとなしいカブトムシを見直したように目を輝かせて目の前で起こったことを一生懸命言葉で表現しようとする姿がみられた。しかし、羽を広げて大きな音を出しながら飛ぶ姿を怖がる子どももいて、「怖かった〜」といつまでも保育士にしがみつく姿もある。全員の子どもが「いっぱい遊んだからお家に帰ろうね」と飼育ケースに戻されたおとなしいカブトムシをいつまでもじーっとみつめていた。

### みどころ

「カブトムシは動くかな？」と思っているので、動かないカブトムシを見て不思議を感じ、「歩けない」「寝てるの？」という言葉が発しています。また、自分たちで給食室から餌を調達して観察しているので、日常生活で自分たちが気をつけている「食べ物を散らかす」ということをしているカブトムシに気付くことができ、「ぐちゃぐちゃ」と保育者に知らせ、さらに保育者と話すことで「夜はいっぱい遊んでいる」ということを知ります。また、カブトムシは散らかすだけで掃除ができないことも感じ、保育者と子どもたちで掃除をすることになり、餌の調達から掃除までするという「世話」を主体的に行う姿が引き出されています。カブトムシの様子に注目し、不思議を感じ、かかわり方に気づき、「世話をしよう」という心が育ち、行動に結びつきました。